

## 1920年代の斎藤佳三における装飾美術

専修大学 島津 京

19世紀末、ヨーロッパ各国では産業振興の一環として工芸改革が行われ、ドイツ工作連盟やバウハウスのように芸術家が産業を通じて生活に関わる動向が生じた。他方、アカデミズム批判を伴う新興芸術運動において、芸術家たちは旧来の芸術ジャンル解体を試み、建築、工芸を通じて生活に関わろうとした。つまり、近代化に伴う社会の再編成に伴い、芸術が携わるべき領域として「生活」が再浮上したといえる。

翻って日本では、サロンを踏襲した文展のあり方にみられるように、西洋からの「美術」概念移入において、工芸や図案は「純粋美術」から排除された。これに対し、図案家斎藤佳三(1887-1955)は、1913年のドイツ滞在で工芸改革運動や表現主義などの前衛芸術に接し影響を受けると、帰国後は「芸術家としての図案家」像を提示し、大正から昭和にかけて多様な活動を展開する。大正期には、工芸が純粋美術同様に創造的価値を持つ事を、高村豊周などの工芸家が主張したが、斎藤の活動は生活全般に渡り、ジャンルを超えた広がりを持つ点において彼らとは異なるものであった。

このような斎藤の特異性は、その装飾概念に由来すると考えられる。本発表は、これまであまり検討されてこなかった斎藤の「装飾美術」概念に着目することにより、近代日本における装飾概念の一側面を明らかにしたい。

斎藤は、「自己表出」を重視する自身の表現主義的芸術観を保ちつつも、集団としての「日本人」の生活様式を改善するために必要な基準作りとの両立を模索する。ここには、個人的なものや集団的ものの調停という難しい課題が生じているといえる。その解決のプロセスにおいて斎藤は、感性や情念の領域から生活様式の改善を担う「装飾美術」を構想する。斎藤によれば、「装飾美術」は生活に必要とされる人工物や自然物を「組織」し、そこに「美力」を発揮させるものである。そのため「装飾美術」は、単にひとつの物の表面を飾るということ以上の広がりを持ち、ジャンルを超えた展開をなし得るのである。斎藤は、「装飾美術」を「生活芸術」や「組織工芸」などとも言い換えつつ制作し、実践的な方法で普及を図っている。本発表では、例として1920年代の文展出品作と「リズム模様」を検討する。

斎藤の「装飾美術」に対する今日の評価として、その装飾的意匠が当時すでに時代にそぐわなくなっていたというのがある。しかし斎藤の「装飾」概念に着目するならば、装飾に、統一原理としての機能的役割を見出している点で、装飾を附帯的なものとして否定的に捉える機能主義に対する批判になり得ると考えられる。また、文展出品作は、生活環境の質への働きかけという点で当時突出し、孤立していたとする評価に対しては、斎藤と今和次郎の関係に注目し、斎藤の「装飾」観が今にも共有されており、必ずしも孤立してはいなかったことを指摘したい。